目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力を育てる小学校国語科学習指導の工夫
― 関係付けシートを活用して複数の資料を関係付けて書く活動を通して ―

尾道市立向島中央小学校　大矢　純一

研究の要約

本研究は，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力を育てる小学校国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力を相手や目的，文章表現様式への意識をもち，目的や必要に応じて伝えたい自分の考えの理由を書いたり，自分の考えにふさわしい内容を例示したりして書く力とした。この力を育成するために，「複数の資料の関係付け」と「取り出した情報と自分の考えの関係付け」の二つの関係付けを往還する学習が有効であると考えた。そこで二つの関係付けシートを活用して，複数の資料を関係付けて報告文を書く学習活動を行った。その結果，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力が向上した。関係付けシートを活用し，複数の資料を関係付けて書く活動を取り入れることは，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力と意識を育てることに有効であることが分かった。

キーワード：関係付け　往還する学習

Ⅰ　研究題目設定の理由

小学校学習指導要領（平成20年）国語の第３学年及び第４学年「Ｂ書くこと」の指導事項に「ウ　書こうとすることの中心を明確にし,目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。」[1]とある。言語活動例には,「ウ　収集した資料を効果的に使い,説明する文章などを書くこと。」[2]とある。小学校学習指導要領解説国語編（平成20年）では，指導事項ウについて，「調べたことやそれによって深まった自分の考えなど，書こうとすることの中心を明確にし，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて記述すること」[3]と述べられている。

平成 25 年度「基礎・基本」定着状況調査の国語科タイプⅡの「複数の資料を関係付け，理由や事例を挙げて書く」の設問の通過率は，「理由を挙げた記述」27.1%,「事例を挙げた記述」23.9%と低い。平成25年度全国学力・学習状況調査の国語Ｂ「目的や意図に応じ，複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書く」の設問の全国の平均正答率は，17.9%，本県の平均正答率は，20.0%と低い。この結果から，複数の資料を関係付けて，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力は全国的にも大きな課題であると考える。そこで，平成25年度「基礎・基本」定着状況調査の主な誤答の特徴として，次の点に着目した。「理由を挙げた記述」においては，「資料１（新聞記事）と資料２（アンケート結果）を結び付けて読み，それを理由として書けていない。」「事例を挙げた記述」においては，「取組内容は書くことができていても，選んだことに応じていない。また，選んだことに応じた取組内容が浮かばず，書くことができていない。」と報告されている。つまり，目的や必要に応じて複数の資料の情報を関係付けて，適切な情報を取り出すことや目的や必要に応じて具体例を挙げて書くことに課題がある。

本研究では，複数の資料を関係付けて，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く学習指導の工夫について提案する。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くとは

(1) 目的や必要に応じて書く力とは

吉田裕久（2013）は，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くことについて,「記述においても，設定した課題に応じて，取材や構成を踏まえて書くこととなる。それが，『目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く』ことである。」[4]と述べ，目的や必要に応じることを，設定した課題に応じることであると指摘している。そして課題については，「具

体的には，相手や目的をどう設定するか，どのような文章表現様式を用いて，どのような学習計画によって書き進めるかといったことを児童が自ら明確にできるようにするのである。」[5]と述べている。

したがって，目的や必要に応じて書く力を，相手，目的，文章表現様式への意識を持って書く力とする。

相手意識について，小学校学習指導要領解説国語編（平成20年）では，「書く相手としては，保護者や地域の人々などの大人から，同学年・異学年の友達まで多様である。児童自身が課題意識を持って相手を設定したり，書いた文章を相手がどのように受け止めるかなどについても考えさせたりする。」[6]と示されている。児童が課題設定の際に相手に何をどのように伝えようか考えさせることが大切である。さらに，書く目的として「伝える，報告する，説明する，依頼する，案内するなど，具体的な生活の中で必要となるものを取り上げるようにすることが望ましい。」[7]と示されている。国語科の学習が実生活の中で生かされるように，生活の場面を意識して目的を設定することが必要である。また，その目的設定によって文種が限定される。

(2) 理由や事例を挙げて書く力とは

理由や事例については，小学校学習指導要領解説国語編（平成20年）において次のように示されている。「理由については，因果関係がある場合や，複数の要因によって帰結する場合などに応じて，記述する内容を検討したり，『なぜかというと～』，『その理由は～』，『～のためである』などの表現について指導したりする。事例については，エピソードとなるようなまとまったものを取り上げたり，考えに該当する実例を幾つか取り上げたり，具体的な本や文章，絵や写真など事物そのものを取り上げたりして描写や説明をすることが必要である。事例の場合にも，『例えば～』，『事例を挙げると～』，『～などが当たる』などの表現を指導することが大切である。」[8]と示されている。

したがって，理由や事例を挙げて書く力とは，伝えたい自分の考えの理由を書いたり，自分の考えにふさわしい内容を例示したりして書く力であると考える。

(3) 本研究における目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力とは

本研究では，（1）（2）の内容を踏まえ，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力を，相手や目的，文章表現様式への意識をもち，目的や必要に応じて伝えたい自分の考えの理由を書いたり，自分の考えにふさわしい内容を例示したりして書く力とする。

2　複数の資料の関係付けについて

(1) 複数の資料を関係付けて書くとは

本研究で捉える複数の資料とは，目的や必要に応じて収集した全ての資料のことである。具体的には，解説や記録といった文章などの連続型テキストと具体的なデータとして挙げられるグラフや表，写真などの非連続型テキストとの組み合わせとする。

前述の通り，平成25年度「基礎・基本」定着状況調査の複数の資料を関係付けて書く設問の通過率は低く，大きな課題となっている。平成25年度「基礎・基本」定着状況調査報告書（平成26年）では，複数の資料を関係付けて書く過程を「○説明文から必要な情報を読み取ること。○グラフから情報を読み取ること。○説明文やグラフから読み取ったことを関係付けて考え，一つを選択すること。○選んだことに応じた取り組み内容を具体的に考えて，三段落で自分の考えを書くこと。」[9]と示している。

このことから，複数の資料を関係付けて書くことを，目的や必要に応じて収集した複数の資料に含まれている情報を関係付けて，根拠となる情報を取り出し，その情報と自分の考えを関係付けて書くこととする。

(2) 「複数の資料の関係付け」に必要な思考力について

複数の資料を関係付けて情報を取り出すためには，個々の資料から取り出した情報を関係付ける思考が求められる。

本研究では，小田迪夫（1996）と櫻本明美（1995）の先行研究を基に「関係付ける」思考を抽出する。

小田（1996）は，情報の理解・認識に働く思考について，表１のように示している。小田は，このような思考が，「明晰な思考であり，論理のきわ立つ思考であり，理解や表現を明快，明確にするもとになる思考である」[10]と述べている。

表１　情報の理解・認識に働く思考

低学年	①事象の時間的空間的順序性，秩序性をとらえる思考
	②対比的表現において差異性を見いだす思考
	③並列，列挙の表現において，共通性や類似性を見いだす思考
	④事象と事由の関係をとらえる思考
中学年	⑤事象の推移や変化に発展性や法則性を見いだす思考
	⑥類化，分類によって差異性，共通性を見いだす思考
	⑦帰納的に個別のそれぞれから共通性を見いだす思考
	⑧演繹的に共通性をそれぞれの個別性に及ぼして認める思考
	⑨原因と結果，前提と帰結の関係をとらえる思考
高学年	⑩物事の成り立つ条件をとらえる思考
	⑪類推によって物事を想定する思考
	⑫仮定推理によって蓋然的に判断する思考
	⑬仮説を立て，それを証明（論証，実証）する思考
	⑭物事の相関的な関係をとらえる思考

櫻本（1995）は，書くことにおいてはたらく児童の思考について，「子どもがある事柄について筋道を立てて述べようとするとき，その思考は，まず物事を『知覚』し，次にそれぞれを『関係づけ』て考え，その結果，『意義づけ』に至るように進むものと考えられる。」[11]と述べている。櫻本の「関係づけ」は，複数の事柄を関係付ける児童の思考のことである。

櫻本は，児童の作品分析を行い，「関係づける」ために必要な力として，①比較する力②順序をたどる力③類別する力④定義づける力⑤原因や理由を求める力⑥推理する力の六つを導出している。

小田の示している十四の思考と櫻本の挙げた六つの思考力をまとめたものを表２に示した。

表２　小田と櫻本の考える思考，思考力の対応

小田の論理的思考	櫻本の論理的思考力
②対比的表現において差異性を見いだす思考 ③並列，列挙の表現において，共通性や類似性を見いだす思考	①比較する力
①事象の時間的空間的順序性，秩序性をとらえる思考 ⑤事象の推移や変化に発展性や法則性を見いだす思考	②順序をたどる力
⑥類化，分類によって差異性，共通性を見いだす思考 ⑦帰納的に個別のそれぞれから共通性を見いだす思考	③類別する力 ④定義づける力
④事象と事由の関係をとらえる思考 ⑨原因と結果，前提と帰結の関係をとらえる思考 ⑩物事の成り立つ条件をとらえる思考 ⑭物事の相関的な関係をとらえる思考	⑤原因や理由を求める力 （因果関係）
⑧演繹的に共通性をそれぞれの個別性に及ぼして認める思考 ⑪類推によって物事を想定する思考 ⑫仮定推理によって蓋然的に判断する思考 ⑬仮説を立て，それを証明（論証，実証）する思考	⑥推理する力

表２から分かるように，両氏の捉える思考力，思考は対応している。ただ，小田は説明的文章教材の分析から，思考を整理しているため，児童が書く場面で使うには難しい思考も含まれている。一方，櫻本の「関係づける力」は，実際の児童の書いた作品から導き出されたものであることから，児童の書く活動に応じたものといえる。

本研究では，小田の思考も踏まえた上で，櫻本の六つの力を児童に意識的に使わせ，複数の資料を関係付けさせることとする。そこで，児童が使いやすいように六つの力を具体的にし，表３に示すような「関係付ける視点」として提示する。

表３　関係付ける視点

「関係付け」に必要な力	視点
①比較する力	比べて，共通点を見つけてみよう。 比べて，似ているところを見つけてみよう。 比べて，違うところを見つけてみよう。
②順序をたどる力	出来事の起こる順序を見つけてみよう。 物事の並びを見つけてみよう。 物事の大切さの順番を見つけてみよう。
③類別する力	共通点を基に仲間分けしてみよう。
④定義づける力	資料から分かったことを自分の言葉でまとめてみよう。
⑤原因や理由を求める力 （因果関係）	原因と結果の関係を見つけてみよう。 判断とその理由を見つけてみよう。 おたがいに影響し合う関係を見つけてみよう。
⑥推理する力	分かったことから，「○○かも・・」と推理してみよう。

(3)　取り出した情報と自分の考えの関係付けについて

実際に文章を書く場面では，複数の資料を関係付けて取り出した情報が，自分の考えを主張する上で根拠に成り得るか考えることも求められる。取り出した情報が自分の考えを主張する上で適切でなければ，「複数の資料の関係付け」がいかに論理的であっても意味はない。「複数の資料の関係付け」を考える上では，「取り出した情報と自分の考えとの関係付け」が必須である。

井上尚美（1989）は，現代イギリスの分析哲学者トゥルミンの提唱するトゥルミンモデルについて，国語教育の立場からも非常に参考になると述べている。井上（1989）はトゥルミンモデルについて「ある主張Ｃ(claim,conclusion)がなされるためには，それを支える根拠としての事実Ｄ（data）が必要であり，更に，どうしてＤからＣが主張できるのかという理由づけＷ（warrant）がなければならない。しかし，これだけではまだ十分でなく，その理由づけの確かさの程度を示す限定Ｑ(qualifier),反証(「～でない限りは」）を示すＲ（rebuttal），Ｗを支えるための，理由の裏づけＢ（backing）が付け加えられる。」[12]と説明している。

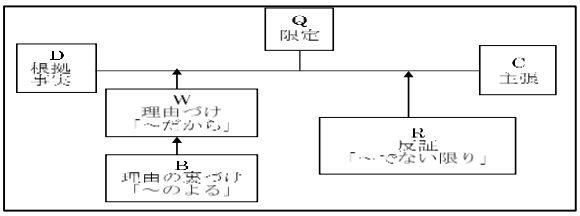

図１　トゥルミン・モデル

しかし，一方で井上（1989）は，トゥルミン・モデルの問題点を取り上げ，６項目のレイアウトの仕方について「Ｑ・Ｒ・Ｂの３つは，はじめのＣ・Ｄ・Ｗに対する『但し書き』（条件づけ）として一括する。（その中での下位区分と考える）ほうが理論的にもすっきりするし，実際的にも扱いやすいと思います。」[13]と述べ，修正している。

本研究では，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力を育てることをねらいとしているため，主張Ｃ，根拠Ｄ，理由付けＷを基本モデルとして研究を進め，限定Ｑ，反証Ｒ，理由づけの裏づけＢについては，扱わないものとする。但し，限定Ｑ，反証Ｒ（「～でない限りは」）については，高学年の教科書教材で予想される反対意見への反論が扱われていることから，今後，児童の発達段階に応じて取り入れていくことも考えられる。

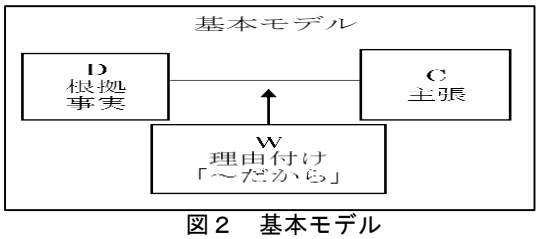

図２　基本モデル

本研究では，図２に示す基本モデルを用いて，児童に「取り出した情報と自分の考えとの関係付け」を吟味させる。

「複数の資料の関係付け」で取り出した情報を基本モデルの根拠（事実）として挙げ，自分の主張との関係付けを行う。そこで，主張に対する理由付けが不十分であると判断した時には，「複数の資料の関係付け」に戻り，情報の選択や修正，関係付けの見直しなどを行う。そして再度，自分の主張と情報との関係付けを行う。このように複数の資料の関係付けが自分の主張にとって適切かどうかを吟味する際に基本モデルを用いることで，複数の資料を関係付け，事例や理由を吟味して書くことができるようになるという成果が期待できる。

３　「関係付け」の学習の展開

本研究の関係付けの学習の展開を図３に示し，二つの「関係付け」の学習展開について説明する。

学習①「複数の資料を関係付ける」とは，収集した資料を目的や必要に応じて六つの視点を基に関係付けることで，より適切な情報を取り出す学習である。学習②「取り出した情報と自分の考えの関係付け」とは，複数の資料を関係付けて取り出した情報を主張（自分の考え）と関係付け，その情報（根拠）が主張（自分の考え）を支え得るものになるのかという理由付けを考える学習である。

本研究では，この二つの関係付けの学習を往還して行わせることが重要である。学習①「複数の資料の関係付け」で取り出した情報の適切さは，学習②「取り出した情報と自分の考えの関係付け」で自分の考えの根拠としてふさわしいかどうか理由付けを考える場面で吟味される。学習②「取り出した情報と自分の考えの関係付け」において，理由付けができない場合には，再度，学習①「複数の資料の関係付け」に戻り，別の情報を選択したり，或いは関係付けを見直したりして，再検討をすることになる。

このような学習①，学習②を往還する学習過程を通して，児童は二つの関係付けの適切さを繰り返し吟味することになる。

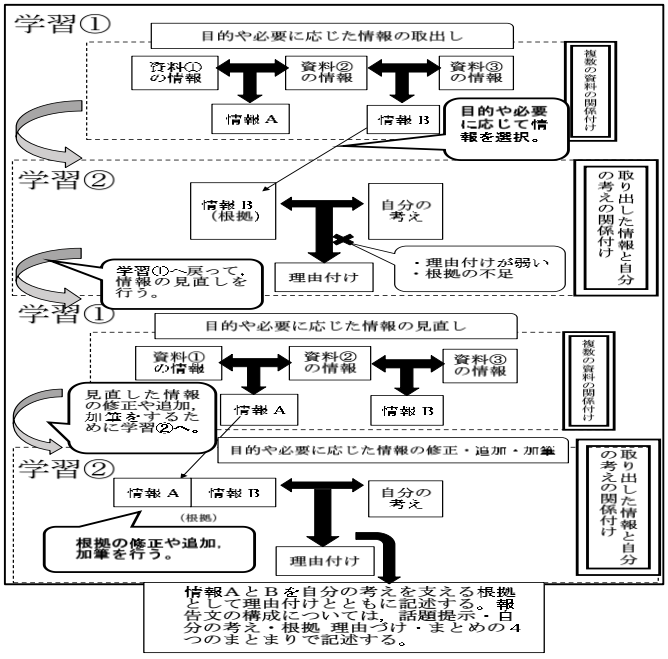

図３　「関係付け」の学習の展開

４　「関係付けシート」とは

関係付けシートとは，図４に示すように児童の思考をそれぞれ可視化することのできる二枚組のワークシートである。

授業では，複数の資料を関係付けて取り出した情報，自分の考えと情報の理由付け等を付箋に書き込ませ，「関係付けシート①『複数の資料の関係付けシート』」「関係付けシート②『取り出した情報と自分の考えの関係付けシート』」の二つの関係付けシートの該当箇所に貼り付けさせる。さらに，取り出した情報と自分の考えの関係付けの適切さを吟味させる過程で，二つの関係付けシート上で付箋を移動させたり，必要によっては付箋の追加や加筆をさせたりする。また，交流の場面では，どのような資料を関係付けて情報を取り出し，自分の考えを述べているのかを関係付けシートを用いて説明させる。

このように二つの関係付けシートを組み合わせて用いることにより，二つの関係付けの思考過程を視覚的に確認させることができる。また，付箋を移動，追加，加筆する活動を取り入れることにより，関係付けの適切さを吟味し，改善していく思考操作をメタ認知させることができる。さらに交流において，相手の思考のどこに良さや改善の余地があるのか，場合によっては学習①「複数の資料の関係付け」にまで遡って指摘し合うことができる。

以上のように活用することで，関係付けシートは，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くことの大きな手引きになると考える。

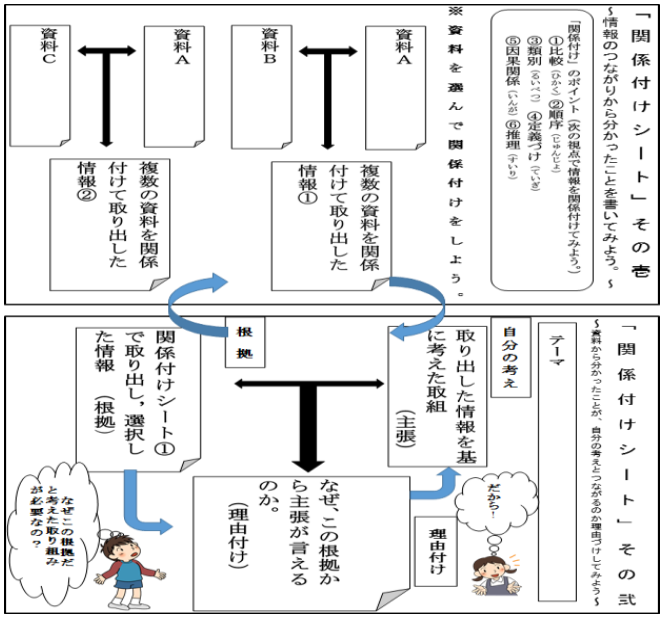

図４　「関係付け」シート

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

複数の資料を関係付けて報告文を書く学習において，「複数の資料の関係付け」「取り出した情報と自分の考えの関係付け」の「関係付けシート」を活用し，往還しながら書く活動を取り入れることによって複数の資料を関係付けて目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くことができるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法を表４に示す。

表４　検証の視点と方法

	検証の視点 （評価規準）	方法
複数の資料を関係付ける	「関係付けシート」を活用することは，複数の資料を関係付けて理由や事例を挙げて書くことに有効であったか。	プレテスト ポストテスト （報告文） 関係付けシート
書くことへの意識	複数の資料を関係付けて理由や事例を挙げて書く意識をもつことができたか。	事前アンケート 事後アンケート

Ⅳ　研究授業について

１　研究授業の概要

○　期　間　平成26年６月23日～平成26年７月３日

○　対　象　所属校第４学年（２学級55人）

○　単元名　目的に合わせて書こう

○　指導事項「Ｂ書くこと」

「ウ　書こうとすることの中心を明確にし，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと」

○　目　標

複数の資料を関係付けながら自分の伝えたいことを，目的や必要に応じて報告文に書き表すことができる。

○　単元を貫く言語活動

資料やアンケートを基に，睡眠の大切さと睡眠の取組についての報告文を書く言語活動

２　指導計画（全９時間）

次	時	主な学習活動
一	1	事前に「睡眠新聞」を基に書いた報告文を振り返り，報告文を書くための学習計画を立て，見通しをもつ。
二	2	「朝食新聞」を基に，「関係付けシート①」を活用して，複数の資料を関係付ける方法を知り，情報を取り出す。
	3	複数の資料から取り出した情報を根拠に自分の考え（事例）を考えて書く。
	4	「関係付けシート②」を活用して，関係付けした情報と自分の考えの理由付けをする。
	5	報告の目的・根拠・自分の考えと理由付け・まとめの四つのまとまりで朝食に関する報告文を書く。
	6	関係付けシートを使って報告文の説明を行い，交流する。
三	7 8	既習事項を想起し，「関係付けシート①②」を活用して，再度，睡眠に関する報告文を作成する。
	9	最初に作成した睡眠に関する報告文と自分で関係付けて作成した報告文とを比較し，友達と交流する。

３　授業の実際と指導の工夫

複数の資料の関係付けの学習においては，別の課題文である「朝食新聞」を使って行った。

まず，関係付けシート①で複数の情報の関係付けを行わせた。それぞれの資料を関係付けの六つの視点を基に関係付けさせて情報を取り出させた。取り出させた情報を付箋に書き込ませ，関係付けシート①に貼ってまとめさせた上で，根拠として使う情報を一つ選ばせ付箋に書かせた。

次に，関係付けシート②を使って，取り出した情報と自分の考えの関係付けを行わせた。関係付けシート①で選んだ情報から取組を考えさせて付箋に書かせ，その取組の付箋と根拠となる情報の付箋を関係付けシート②に貼り付けさせた。それから，理由付けを書かせ，選択した情報が，自分の考えた取組を支え得るか吟味させた。

そして，根拠の不足がある児童は，関係付けシート①に戻らせて情報の関係付けを見直させ，必要な情報を再度取り出させて，関係付けシート②に追加させたり，加筆させたりした。

最後に，完成した関係付けシート②を基に，報告の目的，根拠，取組と理由付け，まとめの順に報告文に書かせた。

Ⅴ　研究授業の結果分析と考察

１　「関係付けシート」を活用することは複数の資料を関係付けて理由や事例を挙げて書くことに有効であったか。

(1) プレテスト・ポストテストの結果より

プレテスト・ポストテストとして，自校の調査を基にした「睡眠新聞」を使って，睡眠の大切さと睡眠をとるための取組について，大きな課題の見られる高学年に向けて報告文を書かせた。睡眠新聞は，資料Ａ「睡眠の大切さを示した文章」，資料Ｂ「午後10時以降に寝ている学年別の児童の割合を示したグラフ」，資料Ｃ「寝不足を感じている学年別の児童の割合を示したグラフ」，資料Ｄ「朝の起き方を示した学年別の児童の割合のグラフ」を載せたものである。平成25年度 「基礎・基本」定着状況調査の問題を参考に作成した。資料Ａには，睡眠の大切さについて二つの内容が書かれている。授業で使用した「朝食新聞」で提示した文章の資料よりも，情報の取出しが難しい資料である。

プレテストでは，「睡眠新聞」を基に，睡眠をしっかりととるための取組とその理由について記述させた。ポストテストでは，再度「睡眠新聞」を基に，自力で関係付けシート①②を活用して報告文を書かせた。プレテスト・ポストテストの結果を図５，解答類型を表５に示す。

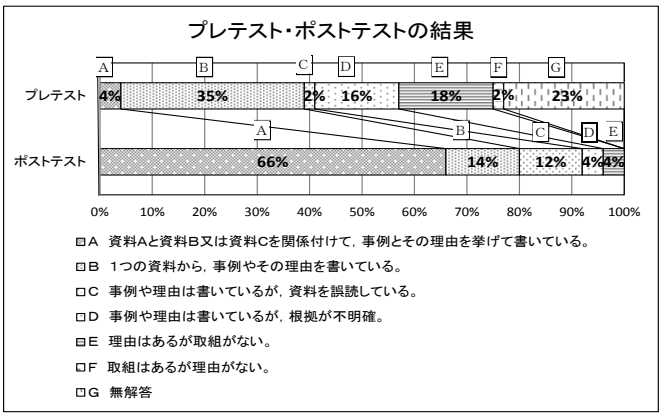

図５　プレテストとポストテストの結果

表５　プレテスト・ポストテストの解答類型

A	資料Ａと資料Ｂ又は資料Ｃを関係付けて，事例とその理由を挙げて書いている。
B	１つの資料から，事例やその理由を書いている。
C	事例や理由は書いているが，資料を誤読している。
D	事例や理由は書いているが，根拠が不明確。
E	理由はあるが取組がない。
F	取組はあるが理由がない。
G	無解答

プレテストでは，資料Ａを根拠として取組や理由を書いている児童が多く，中には，資料Ａをただ写して根拠としている児童や，理由や事例は書いているが，資料を根拠とせず，自分の生活経験を根拠としている児童もいた。また，無解答の児童の割合も23％であった。しかし，ポストテストでは，無解答が無くなり，複数の資料を関係付けて事例や理由を書く児童の割合は，４％から66％まで向上した。関係付けシート①で情報を取り出すことで，資料の共通点や因果関係などを捉えることができ，そこから推理をする児童も見られるようになった。また，関係付けシート②において，取り出した情報が自分の考えを支え得る根拠となるかどうかを吟味させたことで，根拠の不足や内容の捉えの違いに気付くことができた。

一つの資料から，事例やその理由を書いている児童の割合は，35％から14％に減少した。児童の関係付けシートとポストテストを見ると，取組や理由付けから複数の資料を関係付けて考えている意識は見られるが，関係付けシート①における情報の記述不足が原因で，報告文に表現できていない実態があった。関係付けシート①の段階で，情報の記述不足を見直させる指導が必要であった。また，資料を根拠に理由や事例を挙げて書くことができているが，資料Ａを誤読している児童が12％であった。資料Ａには睡眠の大切さについて二つの内容が記されており，情報の取出しの段階で整理が必要であった。

次に，児童Ａが書いた報告文のプレテストとポストテストの内容を比較したものを図６に示す。

児童Ａは，書くことに苦手意識をもっていた。アンケートでは，資料を関係付けて，自分の考えを書くことについては，「できる」と回答していたが，その理由を挙げることは「あまりできない」と回答していた。実際にプレテストでは，資料の内容に合った取組は書けていたが，根拠となる理由について

は不十分であった。このことから，児童Ａは，資料を関係付けて根拠となる適切な情報を取り出すことに課題があることが分かる。

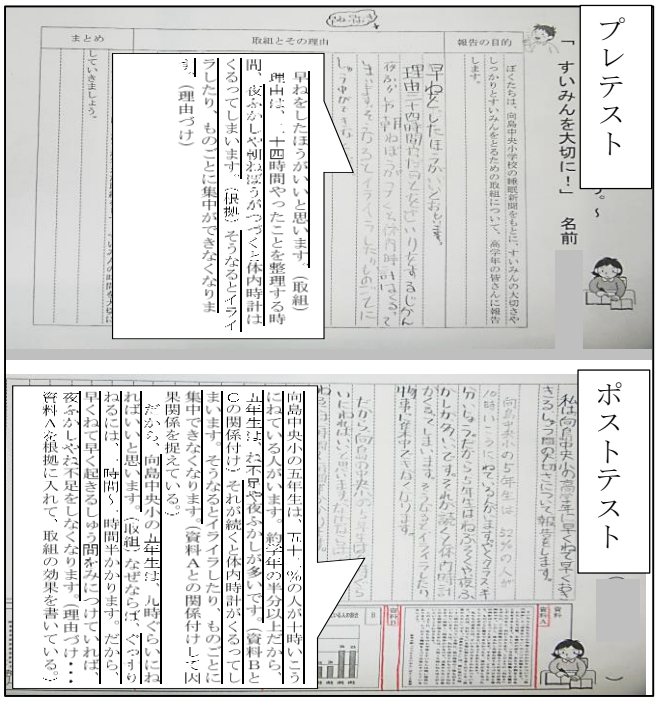

図６　児童Ａのプレテストとポストテストの比較

児童Ａは，プレテストにおいて，資料Ａを根拠として取組を考えている。しかし，資料Ａを誤読したり，なぜ高学年に伝えなければいけないのかという根拠が不十分だったりしている。

ポストテストでは，資料Ｂと資料Ｃを関係付け，高学年の睡眠の実態を明らかにした上で，資料Ａを関係付けて，睡眠の必要性を書くことができた。二つの関係付けシートを活用したことにより，複数の資料を関係付けて，適切な情報を基に理由や事例を挙げて書くことができるようになったと考える。

(2) 関係付けシートにおける関係付けの状況

図７には関係付けシートにおける複数の資料の関係付けの結果を，図８には往還する学習における児童の情報の見直しや修正について示す。

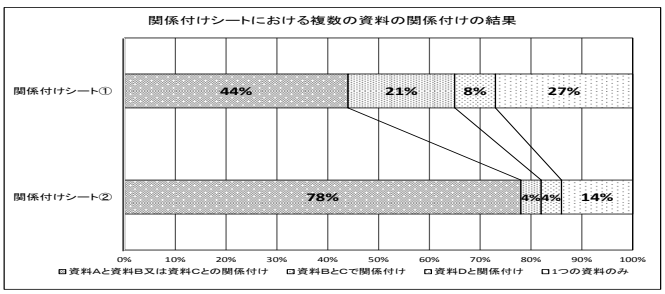

図７　関係付けシートにおける複数の資料の関係付けの結果

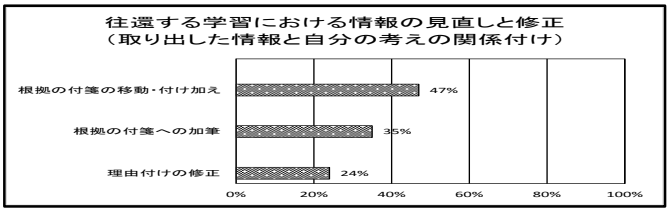

図８　往還する学習における児童の情報の見直しや修正

複数の資料を関係付けて情報を取り出した児童の割合は，関係付けシート①の段階では，73%である。しかし，資料Ｄは，「朝の起こされ方」について示したものであり，適切な情報ではない。また，資料Ｂと資料Ｃは，関係付けにおいて因果関係にあるが，資料Ａを関係付けていないと，なぜ睡眠をとらなければいけないのかという根拠が明確にならない。したがって，適切な情報の選択を行った児童の割合は，44%となる。そして，関係付けシート②の学習後，適切な情報を選択できた児童の割合は，78%まで向上した。

これらのことから，関係付けシート①で六つの視点を使って複数の資料を関係付けさせたり，関係付けシート②で，理由付けを書かせて，取り出した情報と自分の考えの関係付けを吟味させたり，関係付けシート①②を往還する学習を行わせたりすることは，複数の資料を関係付けて目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力の育成に効果がある。

次に，図９に関係付けシートを活用して変容した児童Ａの関付けシートの学習の様子を示す。

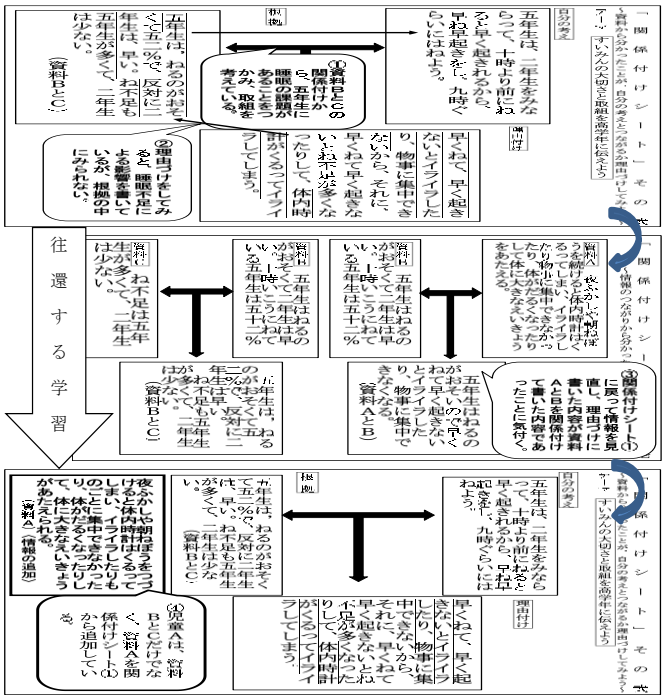

図９　児童Ａの往還する学習における関係付けシートの様子

学習において児童Ａは，関係付けシート①で資料Ｂと資料Ｃを関係付けて根拠とし，取組を考えていた。しかし，関係付けシート②で理由付けをしたことにより，睡眠不足による影響が根拠として不足していることに気付き，関係付けシート①に戻って見直し，資料Ａの情報を資料Ｂと資料Ｃに関係付けて適切な報告文を書くことができた。

この児童の様子からも二つの関係付けシートを活用して二つの関係付けを往還する学習は，複数の資料を関係付けて，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力の育成に効果があると考える。

２　複数の資料を関係付けて理由や事例を挙げて書く意識をもつことができたか

図10では，複数の資料を関係付けて，根拠や自分の考えを書くことについての児童の意識の変容を示している。図10の①②の項目は，資料を関係付けて，事例や理由を書くことができるかどうかを問うものである。①の項目における肯定的な評価の割合は96%，②の項目では94%であり，どちらの項目も児童の意識が向上している。関係付けシート①を使って，複数の資料を関係付けて根拠を捉えさせた効果であると考える。また，③の項目は，情報の吟味について問うものである。肯定的な評価の割合が100%となり，情報が適切か吟味する意識が向上している。関係付けシートを往還する学習が，児童にとって有効であったと考える。

また，アンケートには，「資料を関係付けるやり方が分かった。」という記述が多くあり，児童の複数の資料を関係付けて理由や事例を挙げて書くことに対する意識が高まった。

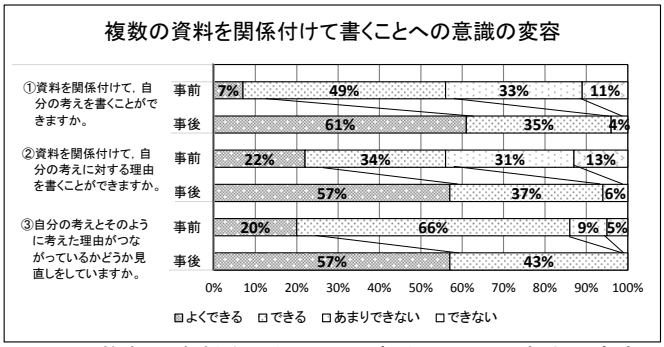

図10　複数の資料を関係付けて書くことへの意識の変容

Ⅵ　研究の成果と課題

１　研究の成果

○　二つの関係付けシートを活用し，複数の資料を関係付けて書く活動を取り入れることは，目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く力と意識を育てることに有効であることが分かった。

２　今後の課題

○　今回は，複数の資料を関係付けて書くことを研究の中心とし，資料を収集する学習活動を設定しなかった。今後，資料を収集する学習活動を含めて本研究の取組を行い，検証，改善を行う。

○　関係付けシートで根拠や自分の考えを明確にもつことができていても，文章に表す時に，根拠の不足が見られる児童がいた。文章構成シートに関係付けシートでまとめた情報や自分の考えを，相手意識をもって書かせるための指導の工夫や文章構成シートの改善が必要である。

○　本研究における関係付けの学習は，複数の資料を関係付けて自分の考えを書く学習において効果的に活用することができると考えている。他の領域や他の教科の学習においても活用していく。

【引用文献】

1)　文部科学省（平成20年）:『小学校学習指導要領』東京書籍 p. 22

2)　文部科学省（平成20年）: 前掲書 東京書籍 p. 22

3)　文部科学省（平成20年）:『小学校学習指導要領国語編』東洋館出版社 p. 58

4)　新しい国語教育を創造する会（2011）:『小学校新学習指導要領の展開』明治図書 p. 27

5)　新しい国語教育を創造する会（2011）: 前掲書 p. 26

6)　文部科学省（平成20年）: 前掲書 東洋館出版社 p. 56

7)　文部科学省（平成20年）: 前掲書 東洋館出版社 p. 56

8)　文部科学省（平成20年）: 前掲書 東洋館出版社 pp. 58-59

9)　広島県教育委員会 （平成26年）:『平成25年度「基礎・基本」定着状況調査報告書』 p. 77

10)　小田迪夫（平成８年）:『二十一世紀に生きる説明文学習』図書印刷 p. 15

11)　櫻本明美（1995）:『説明的表現の授業』明治図書 pp. 21-22

12)　井上尚美（1989）:『言語論理教育入門』明治図書 pp. 87-88

13)　井上尚美（1989）: 前掲書 pp. 91-92

【参考文献】

井上尚美（1998）:『思考力育成への方略』明治図書

小林喜三男・荒木茂（1974）:『論理的思考を高める表現指導』一光社